

---

# サクラ\*サクラ

井沢あや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サクラ＊サクラ

### 【Nコード】

N3731A

### 【作者名】

井沢あや

### 【あらすじ】

桜の話。桜と同じ名前を持つ少女の苦悩。私なりに、生きる理由を考えてみました。

風が吹いても、その蕾を固く閉じた桜は散ったりしない。あたしは胸を撫で下ろした。

春なんて来なければいい。そうすれば、桜は永遠に散らずに済むから。

散るからこそ美しいなんて、あたしは思えない。散ってしまった桜になんて、みんな見向きもしないでしょ？ゴミの様に踏み潰される花弁を見る度に、あたしは言いようのない悲しみに襲われるんだ。

あたしの名前は先谷　サクラ。

桜は言わば、あたしの分身。あたしそのもの。

もうすぐあたしの季節が来る。

春なんか、大っ嫌い。

「でもさ、それっておかしくない？散るとかどうとか以前に、桜は咲かなきゃ見れないじゃない」

親友の叶恵はあたしの前の席、本当は高木くんの席なんだけど、そこに座って話している。

あたしが例の話をしたら、妙につっかかってきて。ちょっとした口論になってしまった。

「いいの。あたし、満開になるのは一生に一度で十分よ」

「サクラじゃなくて、桜の話をしてるの！混乱させないで」

「どっちもあたしよ？」

しらっと言ってみせると、叶恵はウザそうに目を細めた。

「それ、本気で言ってるならかなりイタイけど」

本気だけど、あたしは別に、と答えた。アタマのおかしな娘だとは思われたくないからね。

「じゃあ、桜は必要無いのね？それなら安心でしょ？」

「ううん。平穏無事に佇んでる桜の木を見てるのが好きなの」  
「バカみたい、って叶恵は笑った。」

「真冬のカサカサな桜なんて、他のと見分けつかないわよ」

「あたしはつく」

「普通はつかないの！」

ああ、どうやらこの口論に終わりは無さそうだ。だって、あたしも叶恵も意見を変える気なんて始めからないんだもの。

あたしは気付かれないようにそっと溜め息をついた。

ちようどいい時にチャイムが鳴ってくれて、叶恵は席へと戻っていった。次の休み時間までには、今の話を忘れてくれているといいな。

あたしはその一時間のほとんどを、グラウンドの青々とした桜を見るのに費やした。

ここにも桜……。

まだ誰にも気付かれずに、桜は静かに立っている。

「あんたは、綺麗に咲いて歓声を浴びることが幸せなの？」

あたしは分からなくて問いかけた。桜は真っ直ぐ立っているだけ。

「幸せ、なのかな……」

平穏無事な桜の木は、安心するけどどこか物足りない感じ。

「さつきからさ、なんで木に話しかけてんの？」

「え……？」

一瞬、桜に話しかけられたかと思った。だけどそこまでオカシクはなれなかったみたいで、犯人は背後に立っていた男。

「アタマ、大丈夫？」

目の前まで歩いてきた男は自分の頭を指差しながら、何故か爽やかに笑った。

「盗み見てるなんて、趣味悪いのね」

あたしの悩みなんて何にも知らないくせに。

「これ、桜だろ？好きなの？」

「あたしなのよ。これは」

男は何故か、見分けがつかない筈の桜の木を知っていた。ピンク色じゃない桜を分かってくれた。

「早く春にならないかな。ポカポカ気持ち良くてさ、桜の華がいっぱい咲いて。俺、春が一番好き」

「ねえ、その誰かさん。あたしは春なんて大っ嫌い！二度とあたしの前でそんな事言わないで」

あたしは憤慨した。悩みに追い討ちをかける言動は、とにかく控えてほしかった。

歩き去ろうとするあたしを、男のつかい手が引き留めた。掴まれた手が、暖かい。

けれど男の顔には怒りが浮かんでいて……。これって逆ギレ？

「お嬢ちゃん、理由を聞かせて貰おうか。春の何処が嫌いなんだよ！この世に春の嫌いな奴が居るなんて信じらんねえよ」

それほど年が離れているようには思えないのに、明らかにあたしを下として見てるこの男。ム力つく。

「結構いるわよ。花粉症の人が大勢」

「それは……病気なんだから仕方ないだろ。質問に答えろ」

あたしはしょうがなく、今一番の悩みを告白した。なんでこんな奴に……。

「お前、バツ力だなあ〜！そんな理由で春が嫌いな訳？桜は、次の年また綺麗に咲くために散るんだよ。華だって、晴れ目を見ずに死んで行くななんて嫌に決まってる」

「でも、泣いてるの！毎年、毎年、桜が散るたびに泣いてる気がする

る……」

何よりも、笑い飛ばされたことが悲しい。

「それは嬉し涙だ。なあ、華って何であんなに綺麗なのか知ってるか？」

あたしは首を振る。そんなこと、考えたことすらなかった。

「人を魅了するため」

「何それ」

こいつはきつと、天性の大ほら吹きだ。

「桜は昔から、人の心を掴んで離さないんだよ」

「だから？」

「だから毎年綺麗に咲くのが、桜にとっての一番の幸せだよ」

「なんで？」

男は口の端をニツと持ち上げた。無邪気な顔……。桜のピンクが似合いそうな笑顔だと、何故かあたしは思った。

「まだわかんねえの？桜は人々を魅了して、幸せにするのが幸せなんだよ！」

「あたしは……、あたしはそんなの信じらんない」

幸せって何？桜が散る度、死にたくなる程苦しいあたしの幸せは？桜は何であんなに真っ直ぐ立ってられるの……？

「だって、もしそれが本当なら、桜はあたしなんかじゃない……」  
裏切られた様な気持ちになった。元からあたしが一人で考え、一人で悩んでる妄想にしか過ぎないのに、バカみたい。

- - バカみたいで、切ない。

「いや、そっくりだ」

人より茶色の濃い瞳に、あたしが映った。彼のガラス玉の中で、あたしがグラグラと揺れる。

「なにが？何に……？」

「お前が、桜に？」

「何で疑問系？」

「何でだろうな」

お互い、短く、テンポ良く会話を進める。　あたし達を観てるのは桜だけ。

「あたし昔から、桜と一心同体のような気がしてた。思い上がりだけど」

「桜の華やかさなんて少しも無いけど。……桜はあたしを理解してくれる気がした」

「春の桜より、秋や冬の桜の方があたしと近かった」

「嫉妬してたのかも。名前は同じなのに、春になると見違えるように綺麗になつて、みんなに注目してもらえる桜に……」

「あたしはいつも隅の方に座って、中心を眺めてるような子だったから」

「……桜を独り占めしたい」

「あたしは花びらを踏んづけたりしないし、誰よりも桜の気持ちが分かるから」

「そうだよね？」

男は一言も言葉を発さなかった。ただ、じつとあたしを見据えて、あたし話を聞いてくれる。

その様子は、幼い頃に話を聞いてくれた桜の木にそっくりで……。穏やかで、たくましくて、寛大な桜が見えた気がした。

あたしは口をつぐんだ。自分があまりに幼稚で、くだらない事を

言っているのに気付いたから。

「桜にそっくりなのは、あなたの方よ……」

男は桜色に微笑む。華やかな笑顔、無表情なあたしとはやっぱり真逆。

「俺は、桜だからな」

「じゃあ教えてよ。あたしはどうすればいい……？」

「簡単じゃん。自分らしくしてればいい。少しでも幸せになれるように」 そんなこと簡単に言わないで欲しい。自分らしく居ることの、なんて難しい事だろう。

「いつものサクラらしくさ。桜に悩みきいてもらうくらいでいいんじゃない？」

いつものあたしなんて、知らないくせに。優しい嘘は、優しくなれないんだから。

「人も桜も関係ない。この地球上に生きる全ての命は、きっと幸せを求めて生きてるんだ。幸せを探すために、産まれて来る」

「桜も……？」

男は質問には答えなかった。その代わりに、桜色の笑顔が満開に咲いた。それが返事。

「また来いよな。待ってるからさ。春になったら、ぜってえ来いよ」

「うん……。分かった」

男は名残惜しそうに肩を潜めて、もう一度微かに微笑んだ。

あたしも少し寂しく感じて、男にそっと微笑み返した。

「サクラのために、満開に咲いててやるからさ」

あたしは突風に思わず目を瞑り、再びゆっくりと開いた。

空中から、ひらりと一枚の葉が落ちる。押し花になってるピンクの花びら。

男は、声だけを余韻として残して、跡形も無く消えてしまった。

「桜……？」



甦る。昔よく一緒に遊んでた男の子の事。いつもそばで満開に咲いてた大きな桜の木の事。

そう言えばよくあの子に慰めてもらってた。

あの子は誰だった？いつ知り合った？思い出せない……。

今の男は誰だった……？どうしてあたしの事を知ってるかのように話してたの？

「消えてしまってから気付くなんて……」

あの男は、あの時の子だ。じゃあ、また来いよって言うのは？ここ？それとも……。

「春になったら、また会えるよね？」

あたしは前を向いて歩き出した。シャンと背筋を伸ばして。さあ、幸せを探しに行こうか。

桜、桜、ピンク色に輝く桜。

桜が満開になるころに、あなたに会いに行きます。

サクラは桜と共に……。

F i n \*

（後書き）

結局は、どんな形であろうと皆欲しいのは幸せ。産まれて、死んでいくことに、意味なんて無いかも知れないけど、それでも人が生きようとするのは、先にある幸せを求めるからだと思う。未来に幸せが欠片も見えなくなってしまうたら、人は死を選ぶのかな……？

そんな世の中ではあってほしくないと思う今日この頃です。  
では、ここまで読んで下さりありがとうございます。意見・感想など、お待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3731a/>

---

サクラ\*サクラ

2010年10月8日15時07分発行